

ぐんまの「魚道」を考える（11）

今回の魚道は“仮設の魚道”です。一時的に設置する魚道のことを仮設魚道と言います。魚道が壊れたりした場合の本格的な復旧が完成するまでの一時的な対応であったり、魚道が無い位置にアユの遡上期に短期的に設置する魚道です。

土のうやパイプ支柱を利用した簡単な工事により増田川に設置した仮設魚道（右）
（2008年5月）



左下：魚道設置前

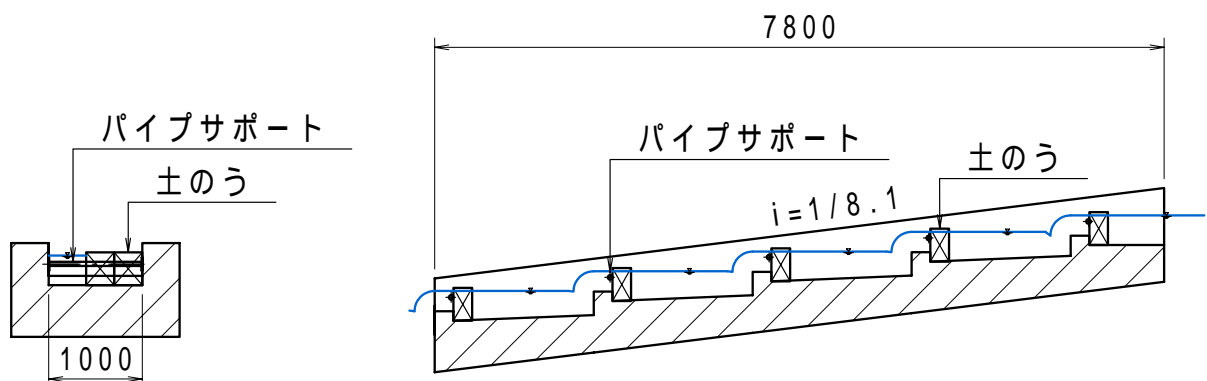
隔壁が無くなり遡上が困難となっていた。

右下：魚道設置後

立派な仮設魚道で遡上が可能になった。



5月1日に江戸川で捕獲された天然稚アユが魚道下流の増田川へ放流され、仮設魚道を遡上したことが確認されました。



江戸川の河口には、金町浄水場の取水や塩害を防止するために「江戸川水閘門」が設置されています。この水門には魚道が設置されていないため、平常時にはアユの遡上が困難となっています。

～稚アユ救出のため簡易魚道の実験をしています～

～簡易魚道による実験～

閘門を通らずに水門側へ進入した多くのアユは、水門の下流でのぼれずにいます。そこで簡易的な魚道を試験的に設置し、アユを閘門側へ移動させることが可能であるか実験をしています。今年には簡易魚道の設置によって、どれくらいのアユが魚道を利用するか調べ、簡易魚道の効果を確認し、今後の対策を検討していきます。



アユがパイプによって通過している様子



仮設魚道



ほくらは水の流れを感知してのぼるんだ

簡易魚道内をのぼるアユのイメージ

国土交通省 関東地方整備局 江戸川河川事務所 調査課 04-7125-7317
江戸川河口出張所 03-3679-1460

江戸川の仮設魚道は、山間地の水路等に利用するポリエチレン製の大型U字溝を利用して遡上実験を行っています。

現在でも壊れた魚道が放置される傾向がありますが、今後の社会状況を考えれば、一層この傾向が強まると思われます。このため魚道の本格的な修復は期待しにくくなる可能性が高くなります。こんな時に仮設魚道を利用して、アユ達の遡上障害を無くして行くことを考えて行くべきだと思います。簡単な仮設の魚道であっても、アユはしっかり遡上します。

もう30年近く前のことですが、伊豆の狩野川支流の大見川で、江戸川の実験と同程度の大きさの魚道をベニヤ板と単管パイプを利用して現場に設置し、魚道下流に狩野川漁協から提供を受けた成魚のアユを放流して、遡上の様子を見る実験を行ったことがあります。魚道もアユのことも解らない私は「アユの生態(1978)中公新書」の著者である信州大学(長野県上田市)の小山長雄教授を、アドバイスを受ける目的で訪ね、教授からは「好きなように実験して見なさい」と言われたことを思い出します。狩野川の実験は落差と勾配を変化させて遡上数を調査し、遡上の限界を推定する目的としたものです。実験の結果からは、1/6勾配でも見ている前ですぐに遡上するアユもいれば、なかなか遡上しないアユもいて、生き物を使った実験の難しさを体感しました。実験の終盤に激しい夕立があり実験施設が壊れて、大変な思いをしたことが脳裏に浮かびます。

(日本一のアユを取り戻す会 福田睦夫)